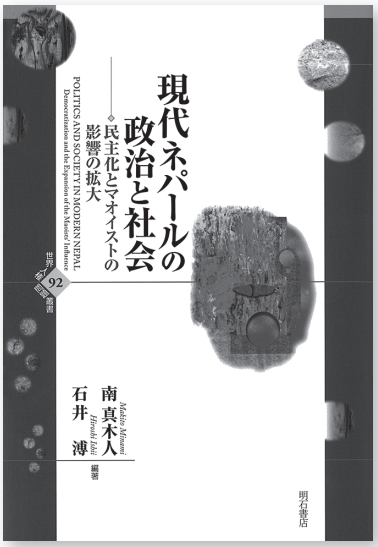
現代ネパールの政治と社会
──民主化とマオイストの影響の拡大（世界人権問題叢書 92）



南 真木人・石井 溥編
明石書店／ 2015 年／本体　5,200 円＋税

1996 年から 10 年続いたネパール共産党（マオイスト）による反政府武装闘争（「人民戦争」）は、約 1 万 3 千人の犠牲者を出す内戦だった。2006 年に地下組織の武装勢力から議会政党に転身（復帰）したマオイストは、2008 年の第一回制憲議会選挙において第一党となる勝利をおさめ、王制廃止とネパール連邦民主共和国への体制転換を国民の支持のもと導いた。2015 年に公布された『新憲法』に掲げられた、共和制（王制廃止）、連邦制、大統領制、世俗国家制、包摂民主制という国是は、マオイストが内戦の過程で要求してきたことであり、マオイストの台頭と膨張なくしてネパールの変革は起こりえなかった。

冷戦が終結して久しい今日、なぜ毛沢東主義なのか、マオイストは何をどのように行ってきたのか、そして政府や地域社会及び人々はそれにどう対応してきたのか。こうした疑問に答えるため、国立民族学博物館の共同研究「マオイスト運動の台頭と変動するネパール」（2006 ～ 2009 年度）では、ネパールの社会・政治的な変動とその背景を地域やコミュニティのレベルから多面的に検討し、マオイストがネパールの文脈でいかにして力を持ちえたのかを分析した。現地調査は、科学研究費補助金・基盤研究（B）「マオイスト運動の台頭と地域社会への影響──政体変革期ネパールにおける人類学的研究」（2007 ～ 2008 年度）に負った。本書はこれらの研究の成果の一部として刊行された論文集である。

本書は 13 人の人類学者、地理学者、憲法学者、ジャーナリストによって執筆され、序章及び二部に分かれる 11 章からなる。序章（石井溥）では各章の理解に欠かせないネパール近現代の政治・社会の概況、ネパールをめぐる国際関係が提示され、各論を軸にした本書の包括的な理解と展望が論じられる。

第一部「マオイストの台頭・伸長と人々の対応」では、おもにマオイストが武装闘争を繰り広げた「マオイスト運動期」に焦点をあて、人民戦争に関わる論考が取り上げられる。マオイストのリーダーに対するインタビューを踏まえた小倉清子の論文は、マオイストの闘争の戦略がいかに変遷してきたかを再構成し、彼らが様々な局面で譲歩をしてきた柔軟性を指摘する。2008 年に、ある郡のマオイスト犠牲者追悼文集を入手した渡辺和之は、死亡者の属性などを分析するとともに、マオイストが彼らを殉国者として弔い、遺族の心情に寄り添ってきた実態を描く。他方、安野早己はマオイストによる兵士徴用を恐れて 2004 年に起きた村の集団避難事件とその後の帰還の経過を詳述し、マオイストに対する人々の抵抗と NGO の果たした役割を論じた。名和克郎は極西部ビャンス地方の人々にとっての政治のあり方の変遷と実践を詳述する。人々はマオイストをやり過ごし影響を最小限に留めたが、そうした外部との関係を広く確保し道具的に用いるやり方をビャンスの特徴として考察する。藤倉達郎はマオイストの台頭は開発の遅れや欠如ではなく、逆に、国民教育を含む開発や近代化の結果であるという解釈をマオイスト女性やタルー人社会運動家が身につけた「近代の道具」という視点から議論する。第一部の最終章（森本泉）では、芸能とくにガンダルバという楽師が歌う歌を通して、反国王の運動が大衆化するという、芸能が持つ政治的効果が分析される。

第二部「マオイストの政党化とネパール社会」では、2008 年の制憲議会選挙を中心に、マオイストが政党に復帰し政権を取るに至る「マオイスト政治期」に関連する論考が取り上げられる。谷川昌幸はマオイストの選挙公約を法学の立場から詳細に分析し、彼らが理想とする国家像とその基にある思想を抽出する。K.L. マハラジャンと P.N. マハラジャンは、制憲議会選挙の投票結果を全国レベルで吟味し、マオイストの勝因を、抑圧・差別されてきた人々の包摂に留意した点に求める。他方でその後の政治ではマオイストが国民の負託を過信し、政権を手放すことになったが、その政治的混乱を「市民の至上権」という概念から分析する。南はマガル人の村におけるマオイストの影響を制憲議会選挙の動向などから考察し、マガル協会が進めてきた民族運動がマオイスト運動の躍進により弱化した状況を議論した。同様に橘健一はチェパン人の村における制憲議会選挙及びそれ以前の国政選挙での村人の投票行動を分析し、マオイストが人々の抑圧を顕在化させ、それにより支持を広げてきたことを考察した。第二部の最終章において幅崎麻紀子は、夫を亡くした女性たちの当事者団体（寡婦 NGO）を対象に、彼女らが人権や財産権などの知識を蓄え、社会を恐れずに差別と闘う力を得てきた実践を描く。女性運動の活発化は、マオイストのジェンダー平等の政策から少なからず影響を受けてきたことも指摘する。

このように本書は、マオイストの運動と政治、それに対する人々の対応がともにけっして一枚岩的なものではなく、諸集団の思わくや地域の歴史的・社会的背景が錯綜した複雑な過程であったことを提示するものとなっている。現代ネパールの理解を深め、毛沢東主義や社会運動のネパール的様態の把握に役立つものとして、本書が広く活用されることを期待する。

文　南　真木人

国立民族学博物館研究戦略センター准教授。専門は人類学・南アジア研究。共編著に S. Yamashita, M. Minami, D.W. Haines and J.S. Eades (eds.) *Transnational Migration in East Asia: Japan in a Comparative Focus* (Senri Ethnological Reports 77, 2008)。